

熊本大学蔵永青文庫本「壁草」(中)

岩 下 紀 之

前年度の五号に続いて、秋・冬の部を掲載し、旅の部を来年にまわすことにする。本書の価値については前号を参照されたい。

高野本と幽齋本とが異本関係にあることはすでに記したが、秋の部では、七二二・七三〇・七七六から七八〇までが両本互いに異っている。七七六を引用してみる。

幽齋本

ね覚をはすれと心もなければ、我身の上をいかにもおもひしらぬ成へし、ね覚のみしてとは、心なくてね覚はかりしたる事也

これに対し、高野本では

ね覚をすれと心もなければ、我みの上をしらぬと也
冬の部になると全巻にわたって相違しているのであるが、その中で九九〇・一〇三四から一〇四〇までがほとんど同文となっている。ここでも両本互いに異っている部分とし

て、冬巻頭句に対する注を引いておく。

幽齋本

みむろの山にしくれをよめることおほし、神さひてとは、神無月の心をいへり、神はおほしまさて、しくれのかきくらすみ室の山の事にや

これに対し、高野本

三室には時雨を多よめり、神無月なれはいと、神さひてといへるにや

このように両本が異本関係にあることは明らかである。秋の部は少異があり、冬の部はほとんど全面的に異っているというところであるが、幽齋本、高野本のどちらがより古態を示しているかについては不明とするよりない。ただ幽齋本に關して言えば、書写に際しての引用歌の書式が、冬の部ではそれまでとちがい、和歌を改行して記している。但し、時に二行書の割註になっていることがあるが、秋ま

では注文に続け書きをしていたのである。これは書写段階で生じた、単なる偶然なのであろうか、それとも、冬の一部、さらに旅の部の注として、秋までとは異なる成立の注が取り合わせられていることを暗示するのであろうか。しばらく判断は差しひかえたい。

穂連歌

四七一 たれかはとはむをのゝかたはら

四七二 ふそ吹生田の森の烁のかせ

生田の烁は人のとふ所也、されとも小野ゝかたはらは誰かとほんと也、君住は問まし物を津の国の生田の杜の

秋の初風

四七三 色にはわかぬ庭の夏草

四七四 このねぬる朝け露けき烁は来て

夏草の色にはまた秋のけしきはわかねとも、立烁の朝の露ははや烁と見えし也、このねぬるは朝けのまぐらことは也

四七五 木の間の外の月は見まほし

四七六 松かきにくすはふ岡へ烁は来て

木の間の月は心つくしと読る故也、松かきにくすはふ宿は、さやかなる月見さらんかし、山里のくすはひかゝ

る松かきのひまなく物は烁そかなしき、此歌の心也

四七七 露のみしけきよもきふの宿

四七八 身のうきに虫の音そはむ烁はきぬ

前句いかにも物あちきなき句なれば、身のうきに虫の音

そはんといへり、此類の前句には、いかにもこゝろを付

て案すへしとそ

四七九 心にうかひ烁は来にけり

四八〇 涙もやおちてなへての露ならむ

心にうかふといふを涙のうかふ事になせり、うかふ泪も、

落ては草木の露と一つにやならんといへり

四八一 はつ烁やまたみしか夜のまゝならん

四八二 うすきたもとにうたゝねの露

初烁は衣なともうすかるへし、うたゝねの露にて秋を覚る成へし

四八三 かよふ舟ちもさそふとそしれ

四八四 詠つるゆふ風すゝし天の河

天河の妻むかへ舟を詠やりたる景気成へし

四八五 めつらしく月の影にやむかふらん

四八六 こよひふたつのほしのかたらひ

二星は年に一度あふなとは珍しからむかし、むかふらん

といへるに二の星と付はへるにや

四八七 かりにもあはぬ中そかなしき

四八 いかなれば焔より後は天の河

七月七日の夜ならてはかりにもあはぬ事成へし、星の事をかなしみたる心にや

四九 寺はおくなるは山しけ山

四〇 うつせみの焔かけてなく松の門

は山茂山にせみを付、寺に松の風を付はかり也

四一 雲間もりくる月の夕かけ

四二 契てや萩にはのめく風の音

雲間の月萩の葉風にはのめきたるは、契りてやと見えたる様也

四三 すみふるす里をも焔は尋来て

四四 わか軒はとやおきのうはかせ

古き軒を萩の上風所えかほに吹たる様也、わかとは萩の事なり

四五 またよひに雲かくれせし秋の月

四六 むらさめいつちおきのうは風

村雨に雲かくれせし月の、萩の上風にはれたる景気也、

むら雨いつちとは晴たる事也

四七 はつ焔よりも夜こそ永けれ

四八 萩の音今はたさむくまところまで

萩の音、まところまれぬよは、初焔成とも長かるへし

四九 秋の風ふもとの稲葉吹こして

五〇 かりほのほかにもほふむらはき

此庵は小田もる庵成へし、いなほは吹こす風ならば、かり庵の外も村萩は匂ふへし

五一 焔をはしめと身にな思ひそ

五二 さひしさはもとあら萩のふるさとに

秋は年／＼さひしき物なれば、もとよりの事とふるさとを心になくさめたる心成へし

五三 ひとりなかむる秋のあはれさ

五四 涙もや下葉色つく萩の露

泪も下葉色付とは、秋の感情ふかくなる涙なるへし、／＼秋萩の下葉色付けふよりや独ある人のいねかてにする

五五 袖にうちちる夕露のいろ

五六 小萩はらうつろふ下葉もろきのに

夕露の時分の萩は、下葉もろく有へし、袖にうち散るは下葉の事也、野を行人のさま也

五七 たちそいてぬる焔風の比

五八 さをしかのこもるしけ山くるゝ野に

鹿は夕は立出る物也、こもりたる山より出たる様成へし

五九 かよへるみちの草の絶く

六〇 さをしかのかた岡かくる跡見えて

かよへる道を鹿の通ちにとりなせり

六一 焔は八重たつきりのさひしさ

五三 鹿の音はまかきもわかぬ小のゝさと

小野ゝ里には八雲たつ雲霧を誂ならはせり、霧ふかけれは鹿も籬の外迄来て鳴たる山家の景氣成へし

五三 あり明の月に山風の声

五四 男鹿鳴尾上もきけは枕にて

山風の声を鹿の声になせり、遙なる尾上も鹿の音はまくらの上に聞ゆると也

五五 うへぬ花さく庭の焔草

五六 をしかなく野を朝きりの籬にて

鹿の鳴野をまかきにこめたらは、植ぬ花も有へし

五七 焔風やかて松にもかはるらん

五八 つまとふ鹿のたかさこの声

妻とふ鹿の声には松の風も焔と聞えたと也

五九 おもひ入み山おろしに物かなし

六〇 雲行こす多日くらしそなく

雲行梢に日晚など鳴たる山路を思入は、物かなしくや侍らん

六一 野への千草に露の色／＼

六二 なく虫もひとつ名ならぬ音にたてゝ

露の色／＼とあれば、あまたの虫を付はへる也

六三 かゝるまもなしあさかほの露

六四 松むしの名にはたかへる玉のをに

松虫といへは、千とせも命は有へきに、槿の露のさはかりかゝりたる玉のを、あはれにや

六五 風そよく野ちの萱原くれそめて

六六 虫の音いつれみたれあふ声

かやは乱る物也、虫の音いつれとは、是も色／＼の虫成へし

六七 露ふかき野ゝ花の色／＼

六八 虫の音もわかぬ朝きり夜をこめて

是も色／＼の虫也、夜ふかき霧に花も虫の音も分別なきにや

六九 そのゆへとなき焔なかこちそ

七〇 ひとりなとさのみあなまきり／＼す

蟹かしましく鳴たるを、何ゆへに、秋をかこつらんといへり、あなかまとは、あらかしましと云事也

七一 ねふりさめたる露の手枕

七二 ともし火はまたたく壁のきり／＼す

ねふり覚たるに灯のまた／＼と付る也、灯のまたたくとは、消かたに成てひらめきたるを云り、人の目のまた／＼くに似たる故也、蟹の声に目を覚したる也

七三 ひとりやねなん月ほそき空

七四 虫の音もよはる嵐をかた敷て

虫の音のよはる嵐をかた敷て独ねは、心細かるへし、／＼

岩かねの床にあらしをかた敷て独やねなんさ夜の中山

五五 小萩かもとに風かよふ暮

五六 ふるさとは虫の音にさへ袖ぬれて

小萩かもとに萩風のかよふ古郷は、虫の音にさへ袖はぬれなんかし

五七 山下みちの露のさひしき

五八 虫の音にさそはれくれば草の庵

虫の音に興してはる／＼くれば、草の庵の有をみて、露のさひしきといへるにや

五九 ほの／＼みゆる今朝のしのゝめ

六〇 槿は露の中よりさき初て

槿の夜ふかく咲たる色の、ほの／＼見えたる様はかり也

六一 朝露になる有明のかげ

六二 三夜の程にさけるあさかほ何なれや

あさかほは夜の程に咲てやかてしほるれば、朝露になると云り、有明の月は朝は消るを、あさかほにならへて云るにや

六三

六四 露よりあたのこゝろ成けり

六五 槿にまかきかこはせ住やたれ

槿に離かこはせて住人の心は、露よりもあたらんかし

六六 うつろふやあたなる色の萩の露

六七 六ひとつまかきにさけるあさかほ

萩の露も槿にならひてやあたなる色のみゆるといへり、萩槿のまかきなるへし

五七 露としるとも身をおしめたゝ

五八 槿の花もさかりはある世にて

はかなき朝かほも、一さかりは有物なれば、うき身のあたるをも思ひすてしと也

五九 竹のかす／＼窓そさひしき

六〇 槿はかれし夕かけ露見えて

あさかほはかれし竹に、夕露のかゝりたる様、さひしきとにや

六一 露けさもうちぬる人は思はめや

六二 三月をまぐらの花の萩の野

萩の野に月を枕にねたる人は、物すぎと見えたり、露けきこともしらしとにや

六三 野分のみたれとひもこよかし

六四 萩すゝきいはん方なきふるさとに

野分にはきすゝき乱たる古郷也、皆人は萩を萩といふいな我は薄かうへを萩とはいはむ

六五 秋ふかみひとり分んはおしきのに

六六 うす花すゝき萩のうへのつゆ

六七 萩すゝきの露分ん事、いかにもおしかるへし
六八 うすくこく野分の名残たつ霧に

五九 花は草葉のしのふもちすり

野分の名残の花は乱たるへし、其様は忍ふもちすりのことくにや

五九 槿のまかきの露に袖かけて

五〇 もすそは烺の花そめのいろ

夕かほの巻に、おかしけなるさふらひわらはの、さしぬきのすそ露けきに、花の中にましり、槿折て参るなと有、其面影にや

六一 こゝろをつくす明ほのゝ烺

五二 うす霧の花の色くわかぬ野に

うす霧の中に有花は、何の花ともわかぬ心をつくすと也

五三 何に露けき袖となるらん

五四 ぬやひとつお花かもとのおもひ草

お花は何ゆへ露けき袖とはみゆるそ、思ひ草と根や一つ

にて有らんと思ふ心にや

五五 なひきあひたる露よすゝきよ

五六 女郎花あたの心の花なれや

なひきあひたるといふに、あたの心をは付ぬるにや、女郎花を女によせてあたの心といへるにや

五七 かこつも烺の空はうらめし

五八 身にしむや我身ひとつと吹風に

我身一のにや秋風は入らんとかこちたる様也

五九 たれも見よとかさけるなてしこ

六〇 独あるやとの夕かけ露をきて

ひとりある宿なれは誰に見よとにや、撫子に夕かけ、よみならはせり

六一 おもひつくさぬふるさとの烺

五二 露よりや身をうき事はしけからん

露茂きよりも身のうき事は多からんと也、されは思ひつくさぬといへるにや

五三 ふるはかりなるむら雨のそら

五四 さゝの葉のみ山の露に風立て

篠の葉の露に風たちたるは、村雨のふるやうなるにや

五五 烺はなとうきならはしの夕にて

五六 すみこしまゝのふるさとの露

うきならはしとあれば、住こしまゝの古郷と付にや

五七 ことしも秋よたゝならぬ空

五八 露は袖にふるさと人の夕間暮

毎年の烺のたゝならぬは、古郷人の夕にて有へし

五九 雨にもまさり露そみたるゝ

六〇 朝きりの身のしろ衣しほれ来て

あさ霧にしほれたる身のしろころもは、雨にもまさるへし

六一 いくたひとなくしきのはね音

五三 はれくもる霧に行水野は暮て

幾度となきといふに晴曇きりと付る也、暮る野に鳴の数
く鳴たる心也

五三 行くてみるむさし野々月

五四 霧晴てはるかに水はすみた河
猶行くてなと伊勢物語に見えたり、霧晴てすみた河の
月をみるよし也

五五 月を見へくはこゝを過しな

五六 行舟もをしまか磯の霧晴て
霧晴て小嶋かいそを行舟をおしみたる心也、かの磯に月
をみる眺望なるへし

五七 あはれ見はやの小嶋松しま

五八 夕浪に月まつとまや霧ふりて
とまやに霧ふりたる月をあはれ見はやとにや、前句都な
との人、小嶋松しまをみはやといへる事也

五九 一すちみゆるをちかたの雲

六〇 いらあひに月まつ秋の空すみて
月をまつ空のすみわたりにて、かたはらにひとすち雲の残
りたる成るへし、遠方の雲と云るに、入相のはるかなる
こゑを思ひよれるにや

六一 かすみてくれぬ衣かせやま

六二 三月うすくけふみかのはらいつみ河

三か月のうすく霞たる事也、衣かせ山はみかのはらのあ
たりの名所にや、みやこ出てけふみかのはら泉河かは
風さむし衣かせ山、此心を取り

五三 こゝろつくしのあちきなのよや

五四 すみのほる空より月、木間の月はあちきなく面白とにや
すみのほる空より、木間の月はあちきなく面白とにや

五五 告さりしやとのこてふはあすやみん

五六 暮ことにこそ月はよからめ

月は暮ことによかるへし、されはつけすともあすやみん
と也、月夜よしよしと人に告やはこてふに似たり
またすしもあらず

五七 入日の雲を行末しられぬ

五八 空とをみ山のはのほる月すみて
入日の雲は月の出る時分はきゆるとにや、入日の影も月
いてゝかくるゝよし也

五九 山こそ雲は行末しられす

六〇 爍さむきあらしを月の先たてゝ
嵐を月の先たてゝと云る、山のはの雲は行末もしらす成
ぬへし

六一 たれとなく氷をはしと渡るせに

六二 駒の音する秋の夜の月

爍の月の白きは氷のことくに見えたる様也

六〇三 ひとり雨きく松の下いほ

六〇四 月白き岩のしつくのあかつきに

雨は月には有まし、岩のしつくの雨のことくに音するを
いへり、外にはふらぬ雨なれば、独雨聞とにや

六〇五 めくる日はいかなる方をてらすらむ

六〇六 月にくまなき夜半の大空

月のくまなき夜は、日は又いつ方を照らすらんとにや

六〇七 名に残るしかのふるさと尋来て

六〇八 見ればはるかに月ひとりすむ

さゝ浪や国津みかみの浦さひて古都に月独すむ、此哥
にて心得へきにや

六〇九 又来てせはきやとりとそなる

六一〇 影みてる広沢のいけの月の秋

せはきやとりといへるにひろさはの月あたらしき付様に
や、広沢の池も月の影みつればせはきやとりとにや、来
てとは爍の事にや

六一一 うき世のほかもおなし秋風

六一二 三月こよひ苔の袖にもさやかにて

苔の衣をきたる人は、うき世の外なるへし、月のさやけ
きはこけの袖もかはらねは、同秋とにや

六一三 ゆへありかほにいつる世の中

六一四 うき秋の雲間を月のかき分て

うき秋の雲まを出る月は、ゆへ有かほに見えたるにや、
前句は人の世間をいてたる事也

六一五 爍は来ぬとしれはいたらぬ方もなし

六一六 月やねさめのころなるらん

月はいづくにもいたる物也、又ね覚の心もいづくにもい
たる物なれば、月とね覚の心は一つにやと云り、遥なる
もろこし迄も行物は秋のね覚の心成けり

六一七 山ふかく入のみはいとふ世ならめや

六一八 月のころの行末しらはや

月は山へ入物なれば、もし世をいとひてや入らんと也

六一九 すゝ吹風そ野へにはけしき

六二〇 こよひたれ月の手枕夢も見む

すゝ吹風の音には夢も誰か見むとにや、こよひたれすゝ
ふく風をみにしめて吉野ゝたけの月をみるらん

六二一 やゝさむき程はしられて更る夜に

六二二 三月は白妙おきはうはかせ

月はすみわたり、荻には風聞えは、弥寒き程はしらるへ
きにや

六二三 今やみやこも殊ふくるそら

六二四 なかむれば月のうちさへ物さひし

前句の都を月のみやこに取なし侍るにや、されは月のう
ちとは云るにや

六二五 たちて見あてみ思ひこそやれ

空三 こゝもかくのこるくまなき月のうち

此下衆さへくまなき月なれば、いかに月の宮の猶さやかならんと思ひやる心にや

空七 行人もなき道のへの稲

空六 わか影に友なひつゝも月をみて

我かけを友にして月をみたるさま也

空五 見はてぬこゝろのちもうらむな

空四 ふけ行は月やくもるとかへる夜に

見はてすしてかへる人の心は、曇とも恨しとにや

空二 うちなかむるもあちきなの世や

空三 更る迄身のうき月をいみかねて

月を独みるは死相也、されは凶事也、月に興していみかねる心にや、前句物あちきなき句なれば身のうき月とにや、\ひとりねのさひしきまゝにおきぬつゝ月をあはれ

といみそかねぬる

空三 すめるこゝろそわかともとなる

空四 更る迄さひしからすは月も見し

月はさひしくてみるは友にもまさるへし、さひしとはおもしろき事にもいへり

空五 さひしきにこそ心すみぬれ

空六 またれつる友さへ月にわすられて

これれもひとりみる月おもしろきとにや

空七 えそしらぬ又やささらん新枕

空六 ふしみの月のあり明のころ

新枕とふしみにおほく読り、伏見の月面白にねたる人の

こゝろ成るへし

空五 旅人は所／＼に夜をこめて

空四 霧のまよひの有明のころ

きりのまよひのたひ人は、所／＼に行迷ふへし

空三 きりたちまよふ山はあけかた

空二 行こゝろ月のいつくにわかるらん

月の入を思ひやれる心は、いつくにてか月にわかるらむ

とにや

空三 種はたゝかきりもしらす長夜に

空四 山のはつらし月の行すゑ

爍の夜はかきりも長きに、月ははや入は、山のはをかこ

ちはへるにや

空五 われにそかはるこゝろしらるゝ

空六 月をたにめてし今はの老やたれ

いつもおもしろかりし月を、老てはめてしと思ふ心のつ

きぬるを、われに心かはりのしたると也、老や誰とは、

老といふ物は何物そといへり、\大かたは月をもめてし

これそこのつもれは人の老となる物

空七 霧ふく風にあるゝふるさと

空元軒はもる月こそむかし忍ふ草

月にはかならず昔を思ひ出る也、されは月を昔の忍ふ草と云にや

空元 玉をみかけるいにしへのあと

空吾 浅茅生や焔のしら露月すみて

あさちかはらの露に月のすみたるは、玉をみかくはかりとにや、いにしへの跡に浅茅生と付にや

空三 焔の夜ふくるあさちふの宿

空三 露ことかけする月をひとりみて

浅茅生の宿ならは独そ有らん、露ことに影する月を独見侍らんはあさからんかし

空三 焔のおもひそなくはかりなる

空吾 ことゝへはこたへぬ月をひとりみて

物いひかはす月ならねは、鳴てみるよし也

空五 舟よはふむかひに人は見えやらて

空五 あまひこかとそ月にこたふる

月に舟をよはふむかひに、人は見えすこたへするやうなるはあまひこかといへり

空五 ふたりともあらはせめてのかり枕

空五 月はものいひかはすそらかは

月とふたりのかりふしのさまあはれ也
空五 松に音する焔のうら風

空六 よるのつるの月や更ぬとかへるらん

浦におりゐしつるの、月更て松にかへる計にや

空一 とひ行さきの色は消けり

空三 ちは玉のよからずしるく月すみて

鶯は白物なれば月に色消る也、鳥は月にしるくみゆるとにや、是は鶯に鳥を対して付ぬるにや

空三 荻ふく風よ軒あらしそ

空四 露霜に月の名残やつらからむ

風にあれたる軒はの月のためには、よしあまりあればては、露霜につらからんとにや

空五 たれ露はらふ跡としもみす

空六 月は入山まではいつたつぬらむ

月をたれもおしめと、月の入山まで尋てみる人はなきとにや、月の入山ちの露は、はらふ人もなしと也

空七 さよ更かたのやまほとゝきす

空六 行月やたれもめさましあへさらむ

郭公の声に目をさましたる心也、一句は月に目をさましあへぬ事にいへり

空元 むしの音いつれやとの秋風

空五 かけてたれ月の名残やうたふらむ

月にうたふ人の声は、虫の音にもおとらぬよし也
空二 焔も末野ゝ露のさひしき

六三 松むしの声かれ月もほそき夜に

露のさひしさとあれば、松虫の声もかれ、月もほそきとにや、暮爍のさま也

六三 ねさめせしまゝなかきよの空

六四 月や身のうきをもしらせそめつらん

ね覚には身の上を思ふ本意也、月に目をさまして、その次に我身の事を思へは、月や身のうきをしらせ初つらんと也

六五 岩こす水のすさましきかけ

六六 夜わたるや月もうち河爍の暮

月もうち河とは、夜わたるは月もうかるらんと也、うちは物うき所にいへり、岩なみすゝしき河也

六七 うらのとまやもきりははれけり

六八 月にたにはせやをしまのあま衣

霧にしはれたるあま衣を、月に成ともほせやとにや

六九 影みゆる月や雲まに更ぬらん

七〇 ころもてかるゝよひの稻妻

衣手に影せし稲はの、月更てかれたる心にや

七一 山たちのほる月のさやけさ

七二 あふさかやむかふる駒の音はして

駒むかへとは、八月十五夜に、る中より駒のほる也、相坂の関の岩かとふみならし山立いつるきりはらの駒

六三 草葉うらかれ水そ音する

六四 野は月にとこあらはなる鳴鳴て

草はうらかるゝ時分は、鳴の床もあらはに成るへし、一句は月にてあらはになる也

六五 夜もすからみる月のくまなさ

六六 鳴のふすねやもひとつの爍の田に

田をもる庵はまはら成るへし、鳴のふすねやも、田をもる庵もひとつ所也

六七 霜まよひ霧ふる月のしのゝめに

六八 山かたつきて鳴のたつこゑ

山かたつきてとは、山の方へつきてといふ事也、又山のかたちなく成をもいへり

六九 爍風さむきゆふくれの空

七〇 かへる野ゝ袖にさはたつ鳴なきて

鳴の鳴野をかへりくる人の景氣成るへし

七一 やゝさむくなる荻の上風

七二 この比やかりはふるさとわかるらむ

風もやう／＼さむくなる比、かりも今やとこよを別るらんとと思ひやる心也

七三 爍にうかるゝ風もなつかし

七四 古郷もかりとやなきてわたるらん

ふる郷をかりそめと思ひてや渡るらんと也、さやうに世

をおもひしらは、鴈もなつかしとなり、／＼行かへりこゝもかしこも旅なれはくる秋毎にかり／＼となく

六五 秋風はたかなかめより過ぬらむ

六六 わかやとのうへにかり鳴て行

我やとの上に鳴行かりは、たれか詠らんと也

六七 さそはれ月にふくる夜のそら

六八 あはれにもつらにはなれぬかり鳴て

つらとは鴈の友也、立もはなれぬ様也、さそはれと有に付るにや

六九 つらき世をしも何したふらむ

七〇 なきてくるかりもはかなし秋の空

＼秋の空をかなしけに鳴てくる鴈の事也、さほとつらくは何とて来るといへり

七一 すみのほる月もいそけ山のは

七二 はつかりやあらしにふけて聞えこん

月出はかならずかりもこんと待心也

七三 あさち風ふく秋は来にけり

七四 さむくなるみねのしら雲かり鳴て

来にけりとはかりの事にや、／＼矢田の野々あさち色付あ

らち山嶺のあは雪さむくそ有らし

七五 たもとふきまぐみねの秋風

七六 小夜衣夜さむの月にかりなきて

衣かりかねと説ならはせは也、夜さむの月に衣をかりたる心にや

七七 しつかかる霜のわさ田のいかならむ

七八 朝きりさむしかりわたるそら

あき霧にかりのわたる時分面白を、賤か心はいかならんと也

七九 身を秋風よさもあらはあれ

八〇 うつらなくお花かもとの夕月夜

お花かもとの夕月夜をみていへるにや、秋風はさむく吹とも、此面白きはあかぬよし也

八一 露より下の露の月かけ

八二 もろ声になくやうつらの床の山

露より下の露とあれば、うつらのもろ声になく床を思ひよれるにや

八三 露いかならし野への秋風

八四 あはれにもはねをならへしかたうつら

羽をならへしうつらの、かたうつらに成たる野へはいかならんと也

八五 木すゑは秋の風さはく宿

八六 軒ちかき松にはふくす色付て

葛は風さはく物也

八七 物思へとのそてのあき風

七六 花すゝきまねくに人の行やらて

すゝきまねくに、行やらぬ人の心成るへし

七九 風にさきたつかりの一つら

七〇 野への露幾花すゝきこほるらん

かりのさそはれ行風には、いく花薄露こほるらんとにや

七二 風にたなひき初かりそ鳴

七三 村すゝきこの朝露を末はにて

薄の末葉の露はなひく物なれは、風にたなひくといへる

におもひよれり

七三 野は露けしやいつくにかねん

七四 まくらせはちらまくおしき花すゝき

まくらにせはちらんまゝ、いつくにかねんとにや

七五 手折もつ花の秋草打かほり

七六 野ゝみや人の露わくる比

七七 野ゝ宮人の露分る比は、秋草を手折もつへし

七八 風に野分のおもかけそたつ

七九 風に野分のおもかけそたつ

雲の村ゝに行を見て、野分のけしきをしる心にや

八〇 岩木なりともなひかさらめや

八一 吹いつる音は野分の草のはら

野分には岩木成ともなひくへきに、まして草の原のなひく事をいへり、つよき物によはき物を取り出されたる事、

一ふし成るへし、前句は恋也

八二 花むらゝの秋草のはら

八三 朝毎の露のさかりに野分して

朝ことの露に野分せは、花も村ゝに成るへし

八四 おもかけさへもおとろへて似す

八五 一めみし秋の花みな野分して

面影は花の面かけ成るへし、秋の花みなおとろへてなと、

柿の巻に有言葉也

八六 たか上も秋のうさこそしられけれ

八七 野分にあるゝねやの月かけ

野分にあるゝねやの宿のあるし、我身のうきにて人の上

まで思ひしりたるにや

八八 きりゝすしけみかくれにかたよりて

八九 野分のにのこるやまとなてしこ

野分の後のなてしこあはれにおほゆ、我のみやあはれ

と思はんきりゝすなく夕かけのやまとなてしこ

九〇 木のもとさひし雨のふるころ

九一 西里はあれて桐の葉もろき暮毎に

桐の葉の落る音、雨に似たる事也、さひしといへるに里

はあれてとにや

九二 たゝおりふしにかはる夕暮

九三 色もなきうらはの秋といかゝみむ

海辺などは秋の色も見えぬ物なれとも、おりふしにかは
る事をいへり、されは色もなきうらとはいかゝみんと也
七五 やとりにぬれぬ袖の月かは

七四 もしくはむうらはのあまも爍の暮

海士人の心なきも、ぬれたる袖に月のやとるをみれば、
心ある袖と見えたるさまにや

七三 もみちをかさす人もこそあれ

七二 月しろき山ちの菊を折はへて

菊もみちをかさして山路をかへる人のさまなるへし

七一 またれにけりなこそ初かり

七〇 夷わすれめや菊の花さく爍の空

菊の花のさく時分、かならず鴈のまたるゝ事也、\ かり
なきて菊の花さく爍はあれと春のうみへにすみよしのは
ま

六九 きのふの花にけふもうかれぬ

六八 小てふのみまかきの菊にめぐりきて

これは十日の菊の事にや、昨日の花とあれば、こてふの
めぐりきたる心也

六七 いなむかたなくたのむふる郷

六六 尋ぬとて夕の外の秋やみん

爍のさひしき事はいつくの里も同事成へしとにや、秋や
みんは、やはみん也、いつくもおなし爍の夕くれの心也

七五 こゝやかしこにうつら鳴声

七四 すみふるす里はゆふへの爍の風

あれたるさとは、かならずうつらなと鳴へきにや

七三 むかしもかくはたれうからまし

七二 美爍はたゝ古郷人のゆふへにて

爍のうき事も只ふるさと人の夕にかきるへきにや、いた
りてうき事をいへり

七一 いにしへを忍ふにいとゝ露けくて

七〇 美老ぬるはかり秋はたれうき

いにしへを忍ふゆへにいとゝ露けきとにや、されは老ぬ
る程は誰うからましとにや

六九 うきなくさめの月もはつかし

六八 住かたき世にしも秋をあまたへて

すみかたき世のなくさめには、月はかりにや
七五 爍のまくらを誰さたむらん

七四 露は身もうきぬはかりのうたゝねに

身のうくはかりなる枕は、さためかねたるへし

七三 荻ふく風に猶むしの声

七二 荻たかね覚露をかこたぬ夜はならむ

荻の上風にね覚したる人は、露をかこつへし

七一 美 いつかわか身のことをしらまし

七〇 美 かきりなくね覚のみして長夜に

ね覺をはすれと心もなければ、我身の上をいかにもおもひしらぬ成へし、ね覺のみしてとは、心なくてね覺はかりしたる事也

六七 山かけや心ほそくも妹更て

七八 かけひの水のなかき夜のおと

かけひの水の音心ほそくきこゆ

七九 くりかへしてやかたりあかさむ

七八 秋のよは思ふ事さへつきぬへし

只夜きよの事をいへり

七一 有明とわかぬや春の影ならむ

七二 妹のね覺の老のあかつき

秋のね覺の月は、老の涙に霞たる事にや

七三 あかつきさむみ露な時雨そ

七四 まはらなる板やのね覺妹更て

まはらなる板屋の露けき様にや、されは露なしくれそと

也

七五 あくるまのかきりもしらす月澄て

七六 鐘そおとする秋の夜のそら

月はよの長きもしらす残たる鐘の音する事也、限あれば

明なんとする鐘の音に猶長きよの月そ残れる

七七 月みれはおりにふれたる色有て

七八 たれ白妙のころもうつらむ

月のすみたる夜、白妙の衣打音なれば、折にふれたるにや

七九 うちむかはれす山風の暮

八〇 白妙の月にきぬたを巻すて、

打むかはれすと有に礎を巻捨てと付にや

八一 露より霜にしろき月影

八二 衣うつきぬたにいたくさ夜更て

露は宵の間置て、更れは霜の置たる事也、礎とは衣うつ

はん木也

八三 ひとり音する荻の上風

八四 から衣うちすさむ宿は月更て

打すさむとはうちやみたる事也、されは独音するとにや

八五 月をみるよや人にかはれる

八六 うちたゆむきぬたの上の松の風

人にかはれるとは、衣うつ人の打やみたるに、まつ風の音ひとのかはりに音するやうなれば也

八七 ね覺するよのさをしかのこゑ

八八 月にもる稲はの風をまくらにて

いなはの風にね覺したる事なるへし

八九 暮ぬれは妻とふ鹿のあくかれて

九〇 色こき早田かる人もまて

色こき早田の上に鹿の鳴たるは、かきりなくあはれなれ

は、かる人もまてと也、＼さをしかの妻とふ山の岡辺なるわさ田はからし霜はをくとも

七九 月をそきよの独ねはうし

七三 稻妻の影たにたゆる秋ふけて

いな妻も絶、月も遅き夜の独ね、思ひやるへし

七五 夜中になりぬ月のさやけさ

七六 浪の音いやたかしまの焔更て

高嶋近江の名所也、夜中の津と云も同前也

七八 嵐のみ吹やときけはかり鳴て

七八 尾上のまつも焔は更けり

をの上の松の嵐はいつもわかぬに、かり鳴て渡るに秋更

たるを知らる心也

七八 かすかになりぬ末のあり明

七八 虫の音もすゝのしのはら秋更て

かすかに成ぬといふに、すゝのしの原と取よれるにや

七八 おとろく程の夜さむにそなる

八〇 夏衣昨日けふかの秋更て

夏衣きしは昨日けふかとおほえしに、はや秋さへふくれは、おとろきたる心にや

八二 むすへはにほふ菊のした水

八三 朝ことのはつ霜さむく秋更て

むすへとは霜の事也、菊は霜置て猶面白き匂ひ有物也

八三 所／＼の小田をもるこゑ

八四 山里は霜をく月に秋更て

霜置月の時分は、小田を所／＼にもるへし

八五 むら／＼にをく野へそ露けき

八六 朝霧にはつ霜ましり焔更て

村／＼に置といへるに、霧に霜のましりたるを付にや

八七 いつくの月にうかれいつへき

八八 おくふかきみねにいさよふ秋の雲

いさよふ雲とはやすらふ事をいふ也、此雲は月のいつく

にうかれ出へきとにや

八九 露のたよりもなき恋やうき

九〇 さをしかの妻とふ野草草かれて

恋やうきとは鹿の事を思ひやる事也

九二 所／＼の露のかりふし

九三 焔の野々風のさゝはらかれたちて

かれたる篠の所／＼に残たるを、露のかりふしとにや

九四 たのむかけそと松もあはれめ

九五 むしの声よる方なけに草かれて

虫の声せし草みなかれなは、松を頼むかけとにや

九六 なくきり／＼すちかきあしかき

九七 野への色あさ夕かけに枯そめて

野への草かるゝ時分は、きり／＼すなとはかならずあし

かきなどのまちかきになくを云るにや

八二七 何をこゝろのしるへともせむ

八二八 色かはる鴝の草くき風たちて

もすの草くきは、物のしるへに読ならはせり、それも色かはる風立たれば、しるへもなしといへるにや

八二九 のこると見るももろき紅葉、

八三〇 あらかりし風のあしたの秋の庭

あらかりし風に残たるもみちもろからんかし

八三一 むら竹の露や葉分にこもるらん

八三二 はやしになにそかた枝色こき
竹のはやしの中より、色こきかた枝のさし出たる事也、
何そとは何の木そといへる心にや

八三三 ふらぬまもくもりはてぬる秋の雨

八三四 真木のはさひし色かはるやま

真の葉をはくもるといへり、惣別のときは木の葉をば疊と云也、雨はふらねと、真木のはくもりたる事にや

八三五 空はみとりにはるゝしら雲

八三六 山のはゝから紅のあきのくれ

青き、白き、紅、三色を興して云るにや

八三七 舟とむる入江の山に鹿鳴て

八三八 浪や夕日のそむるもみち葉

入江の山に鹿はなけと、紅葉となきにや、こゝにては

浪の上に色こき夕日をもみちとみるへきにや

八三九 月まつかたの山そしくるゝ

八四〇 里つゝく音羽のこすゑ色付て

方角は都にて云を本とせり、月待方は音羽山なればにや

八四一 日くらしの声もさひしき山里に

八四二 木の葉色つき霧わたるそら
木の葉色つき時節の日くらし、いかにもさひしかるへし、

これらの句は、心を付てみすはふかき心はしらしかし

八四三 から衣うちはへ月にあこかれて

八四四 たつたの山のしくれするいろ
あこかれてとあれば立田山の時雨する時分の色のこかれたる事をいへり、から衣にたつと云事、付あひ成るへし

八四五 まくす吹まく野への夕風

八四六 色見えぬ松に時雨る秋ふけて

松は秋の色も見えねと、真葛の風にて知る心也

八四七 せき山こゆる秋のたひ人

八四八 紅葉、やおりてかさすもしくらん

関山相坂の事也、秋こゆる旅人はもみちをかさすへし、かさす枝にも時雨のふる事にや

八四九 山とをくかへるかりはのちり／＼に

八五〇 かさす枝のみのこるもみち葉

紅葉をかさしてかへるに、皆散はてゝ枝はかり残たる事

也、散く／＼とあれは枝はかり残るとにや

八四 庭もまきたつ暮のさひしさ

八五 いつ散てもみちを風のつたふらん

楨立庭はもみちなとなけれと、よ所の紅葉を風の伝にも
見んと也、／＼心から焔まつそのは我やとのもみちを風の
つてにても見よ

八六 せきのわら屋の今朝の旅人

八七 思ひやれ嵐の風のあきのくれ

是もあふさかの事也、嵐の風は相坂にてふるく読り、／＼
相坂や嵐の風の寒けれと行末しらねはわひつゝそぬる

八八 うたぬかたなきあさのさころも

八九 霜しろきそのみさかの秋の暮

木そのあさきぬとおほくよめるゆへにや、霜をきたる時
分、かのやまさと人のころもうちたる景気成へし

九〇 入かたしらぬ月のさひしさ

九一 行焔にこゝろも露もをくれるて

月も焔をもおしみつれともかなはて、をくれるたる心不
便にや

九二 あけすくるまで月を詠ん

九三 舌くれの焔草木の露をたもとにて

草木の露をそてにかけて、焔のわかれをおしみたる心成
へし

九四 くちのこりつゝみゆる河はし

九五 水上のあらしのもみち焔くれて

くち残りつゝみゆるとは、紅葉の朽のこりたる事也、

河辺の落葉なるへし

九六 風にまかするおきつしら浪

九七 立田山みねの木の葉に秋暮て

みねの木の葉あきくるればかせにまかせるとにや、おき
つしらなみたつ田山とつけはへるにや

冬連哥

九八 しくれぬ日なくかきくらす色

九九 寒冬くれはいとゝみ室の神さひて

みむろの山にしくれをよめることおほし、神さひてとは、
神無月の心をいへり、神はおはしまさて、しくれのかき
くらすみ室の山の事にや

一〇〇 宮あしつかに夜こそ更ぬれ

一〇一 神無月しくれはかりのをとはして

是も前におなし、神は出雲へおはして、時雨はかりをと
したる、さひしき宮居成へし

一〇二 うつろひはてぬ草木のみかは

一〇三 神無月ふるきみやこは猶さひし

古都のけしきなるへし、草木のみはうつろいはてぬ也、
物ことにうつろひたることをさひしとにや

八六一 さそないつくも風さゆるをと

八六二 かきくもりみやこも雪のみ空にて

都はあらしもきかぬとよめり、みやこさへ冬ふかき雪の
中なれば、ましていつくもさそな嵐のはけしきとなり

八六三 雪けになれば千とりなく声

八六四 古郷のさほの河原のうちしくれ

さほの河原に千鳥よみならはせり、しくれつる程はなか
て、雪けにさえまさる時、千鳥の鳴たる事也

八六五 あふいかにうつ山のこえ

八六六 はれままつ岡へのさとの夕しくれ

前句は伊勢物語の心にや、付る心は逢と云をしくれにな
せり、岡辺の里、彼山のふもとにあり

八六七 立もよれ麓にむすふ草の庵

八六八 ぬれてしくれに行人やたれ

しくれにぬれて行人をみて、あはれをかけたるはかりに
や

八六九 月の影尾上の雲をこえそめて

八七〇 あらしそ松にひとりしくるゝ

尾上のしくれつる雲をさし出たる月也、出ぬれはしくれ
は晴て、嵐はかり松にしくれのやうにきこえたるにや

八七一 さ夜ふけはてぬかす宿もたれ

八七二 時雨へき月ともしらす遠くきて

月に乘して遠くきて、しくれに逢人なるへし

八七三 ふることかたる焔のたまくら

八七四 ひとりのみなかきを明すさ夜時雨

独りねの時雨はふることを語やうなればにや

八七五 焔かせは嶺の松にやかへるらん

八七六 なみたのしくれゆくかたもかな

秋風のやとりは嶺の松にもかへるなり、涙はやるかたな
しとにや

八七七 古郷こひしころもうつころ

八七八 さむくなる柴のと山の夕嵐

柴の戸に籠たる人、かせさむくなりて、古郷を恋しとお
もへる様にや

八七九 風にふけゆく冬の夜の月

八八〇 柴の戸は木の葉そたゝく山のかげ

柴の戸にさはりたるを、人かと思へは、さもなくて、木
の葉のたゝくことを、風に更行といへるにや

八八一 山の木かけの雨きほふころ

八八二 紅葉ちるあらしに人もたちまよひ

紅葉の散嵐に、人のあらしをひたることにや

八八三 河風は浪のゆくゑに吹すてゝ

八八四 みきはあはれにくつるもみちは

吹すてしとは、紅葉はのことなるへし、川に落葉のくち
たるやう也

八五 山に又あるかとへは人もなし

八六 木のはも舟も川かせのをと

山に又あるかとは人のことなるを、付る心は木の葉の事
になせり、木葉は又あるかとへは、舟には人もなく、

河風の音にこたへしたる様にや

筏士よまでことゝはむ水上はいかはかり吹嶺の嵐そ

この哥の心にや

八七 をとあらましき水のしら波

八八 しくるやとみれば岩こす木葉にて

しくれかとみれば、木葉のあらましく岩のあたりにをと

したる事にや、水のしら波は岩の下水などの事にや

八九 としくれぬとや雪ふれる山

九〇 木からしにのこりてさひし嶺の姿

諸木ことく冬枯の山に、松はかり残たる也

雪降て年の暮ぬる時にこそ終に紅葉ぬ松は見えけれ

この哥の心なり

九一 色なる露や焔のおもかけ

九二 花すゝきたか袖となく野は枯て

色なる露といへるに、花すゝき面白や、おも影とあれば

野はかれてと也

九三 ゆくみつきむくあらしふく山

九四 霜をかぬ岩のはさまも草かれて

岩のはさまには霜はをかねとも、行水の寒ければ草もか
れたると也

九五 月はあり明の猶ほそぎ空

九六 霜かれのかた糸すゝき風吹て

ほそぎとあればかた糸薄付るはかりにや、一句の様から

ひてすこぎ句成へし見ればたゝ心もそれと成そ行
かれのゝすゝき有明の月

九七 はしは霜ふり水そこほれる

九八 小篠原つま木の道も冬枯て

をさゝは爪木の道の、橋のあたりのを篠成へし、冬枯の

山路の景気成へし

九九 わかるゝ鴈の遠近の声

一〇〇 霜かれのあし原さむみ舟見えて

芦原の舟見えは、雁はわかるへし

一〇一 月にふけ霜にさ山のあらしかな

一〇二 野はさゝかしけ水こほるころ

さゝかしけとは冬枯たる様也、是は脇也

一〇三 なかれたえぬや水もさひしき

一〇四 山河やうへは氷てをとすなり

山川は上はこほれとも下はなかるゝ也、流たえぬといへ
る山川と付るにや

九〇五 さりけなく水に晴けり今朝の雪

九〇六 月の名残はうすこほりせり

前句は発句也、水に晴けりとあれば、月の氷をつくるにや

九〇七 ほそくのこれるうつみ火のもと

九〇八 滝のいとこのほらぬ音は猶さえて

埋火のほそく残たるを、埋火の本にて滝のいとこのほらぬ音きゝたる様にや

九〇九 いくあり明そ霜さむき空

九一〇 よるの鶴なくやさは水こほりとち

鶴は霜に鳴鳥也、さは水の氷たる時分の有明成へし

九一一 雪にくれゆく駒のあしをと

九一二 はる／＼と岩ふむ河原氷とち

駒の足音にかはらの氷おもしろし

九一三 きけはそとにも鳴のたつ声

九一四 水しろき門田や霜もこほるらん

門田の霜の氷たる比、鳴の立たる様計にや

九一五 行みつさゆる河つらのさと

九一六 下そよく芦の霜夜にめは覺て

河つらの里は、芦の霜夜にはえやはねられ侍らん

九一七 波よりをちにのこる日の影

九一八 松たてる川つらさむくかねなりて

夕陽の景氣計にや、残る日の影に鐘なりてとにや

九一九 かた山舟のよるのあら磯

九二〇 みつとなき塩津すかうら風さえて

かた山、塩津、すかうら、いつれも近江の名所也、みつとなきとは、水うみなれば、塩はみつる事もなきとなり

九二一 こほるみきはにかへるしら波

九二二 山かせにしかのから崎さえ／＼て

から崎に風のさえ渡る日は、こほれる汀にも帰へし

九二三 軒はにたかき雪のよる／＼

九二四 玉すたれ真木の外山の風さえて

夜の雪をけさ簾をまきてみたる跡也、香爐峯雪はすたれ

を巻てみると云詩の心にや

九二五 木の葉かたしき独りぬる山

九二六 岩かねの床は月ふけ霜さえて

＼岩かねの床にあらしをかたしきて独りやねなんさよの

中山

この哥の心まで也

九二七 さゝふく軒は木からしそ吹

九二八 枕まで霜をく月やふけぬらん

さゝふく軒端に木からしふかは、枕まで月の影はもるへ

きにや、＼山風にまやのあしふきあれぬらしまくらに近

き夜はの月かけ、この哥の面影にや

九二九 里とをみのこるともし火更やらて

九〇霜や野てらのかねさそふらん

里遠きとあるに野寺をつくれは付にや、灯更やらてとは、
灯は更ぬに鐘のきこゆるは、霜や鐘をさそふらんと也

九一 たえくみゆる雲のかけはし

九二 霜しろき夜はのかさき声更て

かさきはからすのことにかけはしとあれば、かさき
と付るにや

九三 いかなる岩のはさまにかねん

九四 なくをしのうは毛も水も氷る夜に

前句は旅の事などのこと也、付る心は鶯のこと也、寒夜
をおもひやりたること成へし

九五 水すさましき山かけのみち

九六 さきたつ鴨のむら鳥かすくに

鴨の羽音の冷しく立たること也、山かけと云に鴨付る
事、

吉野なるなつみの川のかはよとに鴨そ鳴なる山陰にし
て

九七 あそふもをしのあとの浮草

九八 雪に今朝にほのかよひち見え初て

鶯と鳩の雪のあしたあそひたる様成へし

九九 山かせたえぬ海つらのくれ

一〇〇 むら千鳥雪ふりぬへく声さえて

衛のこゑにて雪ふりぬへきけ色をするとかや

一〇一 たちこそかへれすむかたやなき

一〇二 さ夜千鳥浦つたひしたること也、いつくも荒磯なれば立

かへるにやと成へし

一〇三 舟路にあらき波のよるく

一〇四 浦つたふ一むら千鳥こゑさえて

是もかくれたる所なし、舟路に浪のあらき夜、一村むら
千鳥のこゑのさひしき躰はかりにや

一〇五 雲ある嶋や雨のこるらん

一〇六 ぬれてなく夕波千鳥行かへり

雨残ると云にぬれて鳴とは付也、一句の理は波にぬれた
るとなるへし

一〇七 やすらふいそはあらき波風

一〇八 立居やはなれしにやすき村千鳥

是は海辺などに立やすらひてみれば、波風のあらきをみ
て、千鳥をあはれみたる心也、なれたるといへるにて心

得へし、なれとは汝と云事也

一〇九 生田の川の鳥のさむけさ

一一〇 冬にうきみをかきりとや侘ぬらん

みを限とやとは、付る心は鳥のこと也、一句は人の事
也、大和物語の心也

＼津の国の生田の川に鳥もゐはみを限とや思ひ成なん

九五 のとかなる空もほとなくさえ渡り

九六 朝日はかりの冬の山さと

山里の冬の日のとかなりつるか、やかて寒成たる事なる
へし

九七 とへかしなかせもさえ行夕まくれ

九八 竹の葉さひしあられふるやと

竹のはに霰なと打散て、風のさえたる夕くれ、いかにも
物さひしかるへし、されはとへかしと也

九九 松にまさ木そちりはそめぬる

一〇〇 雲みれは雲あられふるらし暮ぬめり

松に正木の散初て、空をみれは、霰もちるとなり

＼深山には霰ふるらし外山なる正木のかつら色付にけり

一〇一 柴たくすみ家あるゝ山かけ

一〇二 霰ふり時雨せぬ日をいつかみむ

あるゝ山かけとは、栖のあれたることを付る、心は時雨
霰のあれぬ日もなきとにや

一〇三 雲にあらしのをとそさえぬる

一〇四 雲につらきやししくれもあへす雪やみん

雲に葛城付合也、時雨もあへす、麤而雪をやみんと、嵐
のさゆる音にて推量する心也

一〇五 軒もる風のかはり行ころ

一〇六 雨ませの雪やかつふりつもるらん

軒もるといふに雨を付るにや、雪のつもるまゝに風はよ
はる物也

一〇七 山は雲にもましらさらめや

一〇八 朝またき雪まつ庭の雨さえて

雪を待朝、雪はふらて雨の寒をみて、爰こそ雨はかりは
ふれ、山などには雨に雪もましらむと也、雲にもましら
さらめやは、雪のことをいへり

一〇九 あともなき嵐の露の夕まくれ

一一〇 雲おち葉そなこりけふのあは雪

淡雪は跡もなき物也、落葉などの上にふりたる雪、やか
て消て、跡もなきことを、落はそ名残とはいへり、嵐の
露は雪の消たる露なるへし

一一一 たとるはかりにおもかはりせり

一一二 ふみなるゝ山路に今朝は雪ふりて

山路に雪のつもりたれば、踏なるゝ道もたとるはかりに
や、おも替とは道のかはりたることをいへり

一一三 こ家かすゝかきこもるみゆ

一一四 かすかなる田中の雪の夕けふり

田家の眺望まで也、小家かすゝとある、田中の雪の夕
煙、さひしき句成へし

一一五 とはれぬ事にならふ山さと

九三誰となく雪のあしたやまたるらん

山居はとふ人もなく習たるに、雪などの朝、誰となくて
またるゝこと、不便なる句なるへし

九四をのゝえも朽てや帰る里ならん

九五雪のそなる真木の仙人

斧のえくつるとは、いつくにても程をふることをいふ
也、付る心は、雪の庭なれはをのゝえも朽つへきと也

九六木すゑをまへの柴のかりいほ

九七雪おれの松に戸はその道たえて

梢を前とあるに、雪おれの松面白し

九八いり日の空は風ものこらす

九九雪つもる松におのへの鐘さえて

風も残らすとあるに、雪のつもる松をは付る也、入日と
いふに鐘さえてとにや、一句のしたて、よく／＼吟味す
へきにや

一〇〇やとれは鎖にきよきともし火

一〇一山さとの雪のあかつき鐘なりて

やとれはとは旅宿などの事にや、清き灯に雪の暁と付る
にや

一〇二山田の水のかすかなるをと

一〇三人見えぬ雪にかたふく草の庵

此草庵には人は見えす、山田の水の音はかりしたる事

也、この庵は田なとかり捨たるいほ成へし

一〇四夕しつけしまつ人やこん

一〇五ふりあれし雪のしはしのひま見えて

人をまつ夕、雪の降あれしか、少晴まのあるを見て、待
人やこんといへるにや

一〇六のこる炭うる春のあさ市

一〇七ふりとたえ又雪あらしさゆる夜に

ふりとたえたる雪の、又ふりたれば、うり残したる炭を
もうるへし

一〇八行かたなくは我をたにとへ

一〇九跡見えは心もとものやとの雪

我をたにとへとは、我心をあひてにしていへる也、心も
我友にはならんと也、雪のさひしき時分、行かたのなき
ことなるへし

一一〇わかをこたりそ道にはかなき

一一一心のみ雪つもる宿は誰しらん

前句は道なと稽古する人の、をこたりて物をもならぬ
事にや、付る心は人に無沙汰したることをわか怠といへ
り、心はかりはゆけとも、人のしるましきと也、人の宿
を雪中なにとはぬ怠也

一二二とひくるかたをよしやいとひそ

一二三あとをたにみてや忘れん雪の中

雪中のさひしきを、せめて人のとひたる跡をなりともみて忘んと也、猷そとは、雪に跡を付るはいとふものなれといとはしと也

九三三 うらみはてめやつれもなき人

九三四 庭の雪とはれは今朝の跡もおし

是は又人のとは、雪に跡つかんこと惜と也、されはとはすともうらむましきとにや

九三五 道はあれともくる人もなし

九三六 うとくなる人の心は、雪や積らんと也、道はあれともとはねは、心にや雪はつもるといへり

九三七 たれかはとはむ山のした道

九三八 妻木こるあとさへたゆる雪中

山居は爪木こるつてならてなし、それも雪の深くつもり

九三九 夕になりぬいそく山かけ

九四〇 休むまの妻木に積る雪をみて

つま木の道にやすむまに、雪もつもり日もくるれはいそくとにや

九四一 松なりけりなけふる一むら

九四二 三分さりし雪の朝けのはるゝ野に

雪の朝けは松とも何ともわかさりしか、少晴たる時分、

松の煙たるをみて忝なりけりと余偈したると也

一〇〇三 たれもみな立ちけふの法の庭

一〇〇四 かきたれ雪のふる寺のくれ

一〇〇五 法の庭の雪の夕暮、たれも立ちかるへし、かきたれとはいたくふれる雪也

一〇〇六 ちとりしはなく波の月影

一〇〇七 雪はたゝうへにうきたる淡路山

波の月影とあれば、上にうきたるとは付るにや、しはな

くは茂く鳴事也

一〇〇八 入日影かたふきかゝる興津波

一〇〇九 舟はたしろき雪のつり人

かたふきかゝるといふに舟はたと付也、面白景氣なるへ

し

一〇一〇 夕川や柴つみを舟さしくたし

一〇一一 はるかにしろき雪のうちはし

雪中に柴舟くたる、うち河の景氣成へし

一〇一二 ちとりなきたつ波のさむけさ

一〇一三 舟よする雪の磯崎ちかゝらし

鳴たる千鳥にて、磯のちかき事をするはかり也

一〇一四 ほのかにや夕波衛こゑすらん

一〇一五 松にふゝきの残る一むら

忝にふゝきの残りたるあたりにてなく千鳥のこゑは、ほ

のかにきこゆへし

1015 山こすからす雲になく声

1016 はし鷹をすゑの原野に日は落て

狩場に日くるれば、からすは山こす雲になく様はかりにや

1017 みをうち山のかけとおもはし

1018 さえあかす嵐を床の網代もり

網代はいかにも寒きことをこのむ物也、嵐のさむきことをもうしとおもはしとにや、前句は述懐などの句也

1019 春秋めてし山の木からし

1020 一つはあれと冬こそ月はくまなけれ

月は四時いつれもおなし事なれと、冬の月木葉なともみな散はてゝくまなき事也、源氏物かたりに、冬の月をいたくほめたる事也

1021 埋火にむかへは夜はゝしつまりて

1022 のこりてかせや月にさゆらん

月をみる夜、かせ余に寒ければ、見さして埋火の本にかへりたれば、風のしつまるやうなることにや、埋火のあたりは静なりとも、風はまた月に吹へきとにや

1023 みきりの松そ雪に木たかき

1024 ひまもなくこほる池水月さえて

ひまもなく氷る池の上の月のさえたるは、雪のことにや

1025 夜ふけてをしの霜はらふこゑ

1026 月やわかめさむるたひにさえぬらん

ね覚のたひ／＼月やさえぬらん、鶯の霜をはらふ声のきこゆるとにや

／＼を寒みね覚てきけは鶯そ鳴はらひもあへす霜や置らん

1027 さ夜かせのはけしくふかはいかならん

1028 雲をころもの月のさむけさ

雲を衣にしたる月さむけに見えたる様にや、風の吹はらはゝいかならむと月の心をいへり

1029 又ひとしきりあられふるなり

1030 月みればむら雲かけてさゆる夜に

月の村雲に霞の降あれたる景氣にや

1031 たちやすらへは猶さゆる袖

1032 うつみ火にかへるを月やうらむらん

立やすらひて月をみるに、風の猶さゆれば、埋火の本にかへる月はうらむらんとおもふ心也

1033 さえまさりぬるをちかたの空

1034 まとろみし埋火もきえ鐘なりて

埋火のかすかなるかきゆれば、必さえまさる物也、宵は埋火にまとろみしか、きゆればめ覚たる躰也、をちかたの空といふに鐘を付るにや

一〇三 去年のさむさに又ふくころ

一〇六 老かみによりそふ火桶むつまし

前句余寒の事にや、付る心は毎年のことゝみゆ、夏は扇
冬は火桶にみをなして

一〇七 雪のあしたの人のをとつれ

一〇八 小野山の炭に妻木をおりそへて

雪の朝はかならずをのゝ炭、爪木を持て京に出る也、音
つれば彼山かつのをとつれなるへし、又は雪中に炭つま
木を人の所へつかはしたることにや

一〇九 あるるかきはの竹の下おれ

一〇四 冬かれにかたえかゝれる梅さきて

竹の下おれとあれば、かたえかゝれると付るにや、茅屋
の梅なるへし

一〇一 ほとけの名にもなみたおちけり

一〇三 ともし火の残すくなく年くれて

是は仏名のこと也、十二月必おこなふ物也

一〇四 雪のひかりにしく物はなし

一〇四 春秋はこゝろ／＼のとしくれて

春秋のあらそひ心／＼にあれば、雪の光にはたくひなし
とにや

一〇五 けふかあすかを老の行すゑ

一〇六 年のくれいくたひとてもせめきけん

毎年の歳暮にみをせめて、今はけふかあすかを命にかけ
て在老の事也

＼老ぬとて幾度みをはせめきけん老すはけふにあはまし
物を

一〇七 まてゝふことも春はやはしる

一〇八 おしむそよみの残りなきとしのくれ

老はてゝの歳暮はとり分ておしかるへきにや、春にかへ
しておしむ心也、前句は三月尽などの句也

(太学専任講師)